

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.36

新しい「浜風会」の動き

「令和」に改元された機会に、浜風会は新しい試み、新しい挑戦をしています。そのいづらかを紹介します。

篠原東の宝物を探そうと「神明会館」で例会

十月十七日の例会は、いつもの篠原協働センターから外へ出て、神明宮の中に今年完成した「神明会館」で開催した。

神明宮の詳細の説明を受けた後、境内に出て南から真直ぐ伸びる参道を北へ、幟立鳥居、灯籠、そして拝殿、本殿まで見所について、話を聞きながら見学した。何度も来たことがあったが、時代を表した灯籠が全部で五対、十基もあることに初めて気付いた。昭和七年に建立された社殿は、典型的な神明造りで立派である。

それからこの東にある萬松院と旧東海道にある立場本陣へと見て回った。こうして地元で開催すると、じつくり見ることが出来、新会員だけでなく新しい発見があったことだろう。大変有意義であった。既に七月四日には「坪井ふれあい会館」で実施済み。今後他地域へも出掛ける予定。



神明会館の前で神明宮見学の会員

外部グループとの交流を一步進める

① 浜松日体高校から取材

同校放送部から、電話で篠原に「鈴木姓」が多いのはどうしてか？の質問があり、説明し上げる機会を持った。

八月九日にビデオカメラと、マイクを持っての取材に緊張したが、浜風会が長年取り組んできたテーマだけに、蓄積した資料を使って説明した。若い人達に関心を持ってくれたこと、皆さん満足された様子で嬉しかった。

② 五島歴史クラブとシンポジウム

九月十九日、山下孝先生をコーディネーターにお願いし、五島歴史クラブの山田克彦会長、内山宏之副会長と馬淵豊先生をお迎えし、この地区で大事に伝承されている英国帆船「シエー



浜松日体高校生徒と記念写真



五島歴史クラブとのシンポジウムの様子

ムズ・ペイトン号」の遭難（明治八年）に対する救出活動について、生々しくお話しされた。

- ・ 15人全員を救出した住民の勇氣、集金力
- ・ 住民、浜松県、通訳の連携の見事さ
- ・ あの混乱の時代に報徳の精神を発揮
- ・ しっかり残している古文書 等

に深い感銘を受けた。

浜風会のホームページを開設

浜風会では30年間の蓄積を広く皆さんに知ってもらうため、この程ホームページを開設しました。 URL は hanakazekai.com/

トップページの他、しのはら歴史便り、浜風会活動計画、浜風会トピックスに分けて、浜風会の全てを見ることが出来ます。一度覗いてみて下さい。

「ご批判等、ご意見
見ただくとありがたいです。」
(山下勝彦)

第36号、他頁の紹介

- 2頁：} 浜名湖の鰻
- 3頁：}
- 4頁：“ツバメのお宿”

浜名湖のウナギ

浜名湖ウナギの発祥について

浜松と言えば「ウナギ」と言われていたくらい、全国的に有名な浜名湖の鰻であるが、どのような経過で始まったのだろうか調査した。

一. すっぱんとウナギの元祖

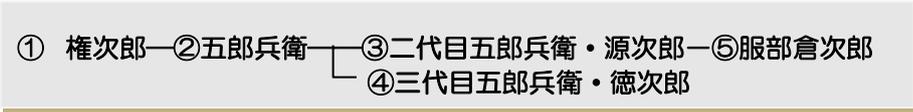
すっぱんとウナギ養殖の元祖である「株服部中村養鰻場」は、江戸時代文政・天保年間（1830年頃）の江戸深川の川魚商、服部権次郎まで遡る。権次郎は深川千田新田にて、隅田川（当時は荒川）等で採れる白魚や鯉・うなぎを長州毛利家に納めることを主な生業としていた。その後、権次郎の息子、五郎兵衛が鮒屋五郎兵衛（屋号 鮒五）と称し、明治維新後は、日本橋魚河岸に店を構え川魚商を継続する。

すっぱんの養殖は、慶応2年（1866）砂村（現在の江東区南砂周辺の長州毛利藩邸内）の鴨場で捕獲された一頭のすっぱん（重さ約1.9kg）を三代目鮒屋五郎兵衛・徳次郎が買い取り、飼育を試みたことからとされている。



服部倉次郎

三代目鮒屋五郎兵衛・徳次郎より事業を引き継いだ当社の創始者、服部倉次郎（1853-1920）



は、商売柄ウナギ、金魚、すっぱん、鯉、鮒等の川魚の生態に明るく、川魚商と並行してそれらの飼育研究を進めていた。特にすっぱんの飼育研究は、その一環として熱心に取り組んだようだ。そして倉次郎はすっぱんの飼育研究に次いでウナギの養殖にも着手する。

二. すっぱん、ウナギの養殖事業の夜明け

当時商用で関西方面に向かうことの多かった倉次郎は、その途中浜名湖周辺が深川に似ていることに気付き、浜名湖でのすっぱんの養殖の可能性について、村田保氏の紹介で、愛知県立水産試験場に中村正輔（雄踏町の旧家中村家の三〇代当主）を訪ねた。その後、共同ですっぱん養殖事業を行うことを提案し中村もこれに賛同した。

明治32年（1866）地元有力者である中村正輔の尽力により、浜名郡舞阪町吹上（現在の浜松市西区舞阪町）にある土地を購入し、翌明治33年（1900）に6.6haの養殖地を造成し、すっぱんの養殖を開始した。しかし当時のすっぱんの市場規模は非常に小さく、事業を軌道に乗せることが困難であった。そこで中村

の水産試験場での研究結果を応用し、大量のうなぎをすっぱんと並行して養殖することで、事業の安定と拡大に成功した。

服部倉次郎と中村正輔による事業の成功が、我が国におけるすっぱんとウナギの本格的養殖の幕開けとなったと言える。

こうしてウナギとすっぱんの特産地としての浜名湖の歴史が始まったのである。

三. 浜名湖は鰻等の養殖に適地であった

- ① 浜名湖周辺の気候が温暖であること。
- ② 養殖池造成に可能な遊休地があった。
- ③ 当時、浜名湖でウナギの養魚（クロロ）が豊富に採れたこと。
- ④ 当時、愛知県三河地区より、ウナギの餌として蚕のさなぎが大量に入手出来たこと。
- ⑤ 浜名湖が大消費地（東京・大阪）の中間地点にあり、経済的利便性が高かったこと。

四. 株式会社 服部中村養鰻場のその後

その後も、浜名湖での養殖事業の拡大を図り、大正13年（1924）現在地に株式会社服部中村養鰻場を設立し、事業継続した。おそろしく設立当時ウナギも並行し生産されていたと思われるが、社名はすっぱんだった。

昭和43年（1968）にスポンの養殖に専業化して現在に至っている。以上「すっぱん服部の歴史」

（株服部中村養鰻場のHPより引用）

ウナギ産業の変革の歴史

一口にウナギ養殖と言っても、産業的には幾多の改革が行われて来た。

一・クロコウナギからの養殖

養殖の始まる前は、ウナギの成魚(成鰻)が商品として扱われ、幼魚(クロコウナギ/体長15cm前後)は商品価値がないものとして捨てられたり、川に戻されたりしていた。

そんな中、服部倉次郎は幼魚に餌を与えて成長させようと明治12年(1879)に東京で、ウナギの飼育研究を開始し、数年後に幼魚から成魚に飼育することに成功、日本で初めてウナギの養殖の事業化に成功したと言われている。その後養殖事業を浜名湖で本格的に開始したことは前述のとおり。

二・政府による養鰻時代到来の誘導

明治43年漁業法が制定され、公有水面の使用が可能になり、更に大正10年には公有水面埋立法が公布され、財界の援助もあって、大正、昭和にかけて浜名湖周辺に養殖池が次々と作られ、昭和初期には五八〇ヘクタールを数え、養鰻時代を迎えたと言える。更に静岡県内はもとより、愛知県、三重県と養殖場は増え続けていった。その結果幼魚が極端に不足してきた。

三・シラスウナギからの養殖

この頃から稚魚からの成育を試みられるよ

うになっていった。戦争中、統制の対象となり

全面的に生産中止になったが、終戦後、冬場から海から川に遡行する稚魚(シラスウナギ)を河口で採取して、餌付けするという現在の養殖方法が、村松啓次郎らの手で実用化が確立したことに、業界は急速に復興していった。同時に養殖は九州地域等全国に広まっていった。

四・餌も変革

時代を経るに従い、餌も大きく変化した。それまでの蚕のさなぎからホッケ、カレイ、イワシ等の鮮魚へと変化したが、魚の漁獲量が減り、生餌を与えることが難しくなると、主流は魚粉に澱粉とビタミン等の薬品を加えた配合飼料に変わっていった。

五・露地養殖から加温式養殖へ

昭和40年代に入ると、加温式養殖への転換が行われた。ウナギは温かい場所にいと早く育つ。

この性質を利用しようとして、池全体にビニールを被せて温室状態にし、ポイラーで水温を上昇させる方法がとられた。

通常シラスウナギは冬場に餌を食べないため、

露地養殖で出荷までには1年半から3年の期間が必要だったが、ハウス養殖で1年中餌を与えれば、半年から1年半程で成鰻にすることが可能となる。養成期間の短縮で、病気などのリスクも減り生産効率は飛躍的に改善された。

浜名湖の鰻を守る「浜名湖養魚漁業組合」

設立は昭和24年、組合の会員数は昭和45年頃的最盛期は450位であった。現在の会員数は約30と大幅に減ったが、次のような方法で浜名湖ウナギのブランドを必死に守っている。

・「トレーサビリティ」で履歴管理の徹底

安心・安全で美味しいウナギを提供するために、ロット番号を表示している。そのウナギは誰がどのように育てたか、シラスウナギの池入れから餌は何をいつ、そしてどのように加工、製造されたか等の履歴が、分かるようになっていて、「浜名湖ウナギ」を求めるお客様に込めている。

・「浜名湖発親つなぎ放流事業」
現在最大の課題はシラス鰻の安定供給で、国を挙げて取組んでいる。

同組合ではウナギ資源を守るために、「親つなぎ放流連絡会」の一員として、毎年親ウナギを今切れ沖に放流している。シラスウナギとなって遡上することを願って。(山下勝彦)



馬郡町 堀内和之さんの池を取材

ツバメの宿

馬郡町にあった「ツバメの宿」が令和元年七月に解体され、無くなりました。しばらく前から既にツバメはいなくなっていましたので、現地には今、何も遺っていません。ツバメが馬郡町に越冬していた事を後世に継承しようと、ここにまとめてみました。

「ツバメの宿」の盛衰

「ツバメの宿」はJR東海道本線舞阪駅の北東約400m(左図)の位置にあり、元は養鰻場の管理人、当時は河合八重吉さん、順次さんの住居でした。(下の写真)昭和の初め頃から毎年11月になると、つばめが飛来し、夜になると建物の中に入り越冬し始めました。河合さんは建物の天井に宿り木代わりに数十本の電線を張り、床には練炭や火鉢を置き、土間を温め保護しました。

宿を利用するツバメは、年々増え昭和38年(豪雪の年)には980羽の大群が押

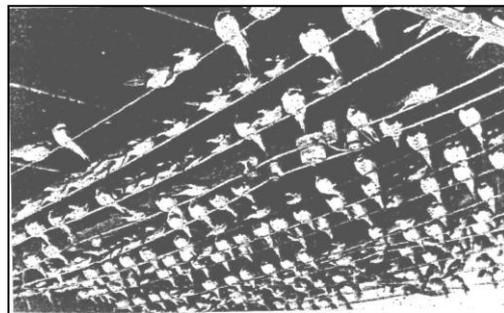
し寄せ、満席となりました。当時は新聞やテレビで新春の心温まる風物詩として全国に報道されていました。ツバメは朝雨戸を開けると餌を求め、遠くは天竜市辺りまで飛び、日暮れになると宿に戻り、電線にとまり休みます。繁殖活動は行いません。日本で唯一大量のツバメが越冬する馬

越冬ツバメのこと

当初「越冬ツバメ」は夏に繁殖したツバメの一部が南の国に還らず、残っていたのではないかとされてきましたが、静岡県が「越冬ツバメ」に足環を付け観察したところ多くの「越冬ツバメ」はシベリア地方などで繁殖し、11月頃日本に来て暖かくなった4月頃退去していく別の種のツバメであることがわかりました。夏のツバメはお腹が白く、「越冬ツバメ」はお腹が赤く見え、やや小さめです。



昭和30年頃のツバメの宿



宿で休んでいるツバメ

郡の「ツバメの宿」は、学術的にみても世界的に珍しいことでした。昭和25年から静岡県林務部が調査を行い、昭和37年に報告書を出し、法律で保護し天然記念物に指定していく必要があるとの見解を出しましたが、昭和50年代に入ると宿の利用が急減し、昭和58年頃には皆無となり

なぜシベリア地方等から浜名湖に渡ってくるのかについては、浜名湖付近の気候の温暖さと、手ごろの餌ユスリカという小さな昆虫が、空中を舞って存在していたからと言われています。しかし現在は、その小さな昆虫がいなくなったといっしょうか。(藤田博辞)



ツバメの宿の位置

馬郡グランド

舞阪駅

浜風会会報第36号
 篠原協働地帯同好会「浜風会」
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
 編集委員 委員長 山下勝彦
 鈴木忠 鈴木理市
 藤田博辞 山中道弘
 発行責任者 山下勝彦
 発行 令和2年1月1日